

---

第2回「大阪・関西万博に向けて  
～機運醸成 京都ラウンドテーブル」

開催報告

---

一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 事務局作成

## 第2回「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」 開催報告

「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」を、2023年4月3日(月)世界文化遺産京都醍醐寺にて開催した。第1回に引き続き、大阪・関西万博プロデューサー6名がリアルに集まり、各プロデューサーが進めている大阪・関西万博の取り組みについて語っていただいた。また、2023年4月20日(木)から期間限定でオンラインにて配信し、多くの方に視聴いただいた。

### I ご来賓のご挨拶

#### ◆ 西脇 隆俊氏 京都府知事

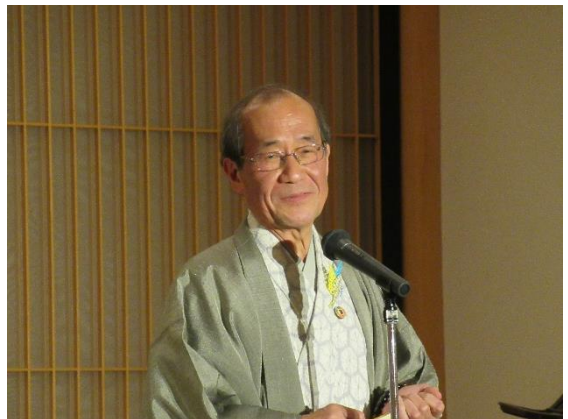
以前、石黒先生とお会いした際、いのち輝く未来社会のデザインとは、突き詰めると文化に行きつくとおっしゃっていた。後日、第1回のラウンドテーブルの議事を見て、なるほどと理解した。先月27日に文化庁が京都に移転したが、コロナの影響で思うように機運醸成ができなかった。それならば、2025年の大阪・関西万博をターゲットイヤーとして、文化庁の京都移転も合わせて機運醸成していきたい。

1970年の万博は何度も見に行った。初めて国際的な感覚の触れ合いができ、技術を使った物質的な豊かさを感じた。今回の万博はそうではなく、まさに文化だと思う。文化庁が移転して来た京都から文化を発信する。日本中を文化で元気にすると共に、日本文化を国内でもしっかり広げていくということで、大阪・関西万博と一緒に機運醸成できると考えている。まだまだ勉強していきたいので楽しみにしている。



#### ◆ 門川 大作氏 京都市長

第1回に続き、京都が誇る醍醐寺さんで開催して下さって感謝申し上げます。第1回でも、プロデューサー6人から熱い話を聞かせていただき、いのち輝く未来社会をテーマに、創造力高く準備していただいているなど期待に胸を膨らませた。毎年、醍醐寺さんで機運醸成していけたら有難いと思う。文化庁が京都に全面的に移転してきた。8年前に文化庁を京都に誘致するため、オール京都で国に要望に行った。東京では本気で京都に移転しようと考えている人ではなく、ちょっと熱くなりすぎではないかと言われた。そこからの出発であった。都倉長官も文化庁の移転と万博を繋いでいこうと声高らかに宣言された。これは京都の為だけではなく、世界から尊敬される日本になるための大切な営みである。そのために、万博は成功させなくてはいけない。来週には起工式があり、ちょうど2年前となる。いのち輝く未来社会のデザ



イン、まさに醍醐寺さんが、京都が、日本が 1000 年を超えて祈ってきたテーマだと思う。共に努力することを誓い挨拶とさせていただきます。

◇ 高科 淳氏 公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 理事・副事務総長



京都府知事様、京都市長様から大変力強いお言葉をいただき、心強く思った。いのちをテーマに掲げる初めての万博。コロナやロシアのウクライナ侵攻があり、分断された世界が再び一つの場に集う機会にしたいと思う。多様な価値観が交わり新たな繋がりを促進していく。一人ひとりのいのちを守り、生き方を見つめ直し、未来への希望を世界に示す万博にする。来週には2年前を迎える。4月から建設が始まり、年内には入場券の販売もしたいと考えている。全国の皆様に万博の開催を実感していただけるよう機運醸成に努める。午前中には咲州の博覧会

協会に入所式があり、新たに190人の方を迎えた。この体制でいよいよ2年となった準備を本格化させていきたい。万博では何が鑑賞でき、何が体験できるかは予め分からないところが、他のイベントとは異なる部分である。博覧会協会では公式キャラクターのミャクミャクの全国訪問を始め、テーマソング、ポスターなどを展開しているが、万博で鑑賞、体験できるものを皆様にお示しすることが大切だと思う。シグネチャーパビリオンは博覧会協会と共同で8名のプロデューサーが独創的な感性や専門性で万博のテーマを表現する重要なものである。その最新の準備状況などを直接ご説明いただける貴重な機会である。皆様の期待を高め、興味関心を持っていただけるものと期待している。ご来場の皆様、夢洲機構には今後ともご協力いただきたい。

II (公社)2025年日本国際博覧会協会 プロデューサー6名のスピーチ



◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー



会場デザインは大きな円の形をした大屋根が特徴である。大屋根は来場者が通る主要なサーキュレーションの場所であり、来場者を日差しと雨から守る機能的な場所でもある。直径 650m、一周すると 2 kmある。幅は 30m、高さは一番高いところで 22m、この大きな構造物を木造で造る。おそらく世界最大規模の木造構築物になる。木造は世界的に見直されており、木造の超高層、大規模建築はヨーロッパ、北米、カナダ、アメリカ、オーストラリアで研究されている。理由は持続可能な建築素材であるということである。

鉄やコンクリートは排出する二酸化炭素が大問題になっているが、木材は育つ過程で二酸化炭素を吸収する。伐採をして木材を使うと、また苗を植えて循環していく。これからの未来にふさわしい素材として海外で研究されている。日本には 1000 年以上の木造の伝統があるが、大規模木造という点では少し遅れている。でも、すぐに挽回できると思っている。万博の機会を利用して、日本の大規模木造をもう一度、世界に発信すべきだろうと考えた。構造の作り方は清水寺の舞台の下のところと同じ作りである。柱に梁が差し込まれ、楔で止めている。伝統的な木造の方法を現代に蘇らせ、金属部品を組み合わせ構造計算し、アップデートして使っていく。コストも抑えないといけない中、どうしたら実現できるかをゼネコン各社、設計事務所各社と協議し、何とか実現できるようになり、来週、起工式から準備が進み、工事に入れることになった。実現するとものすごくダイナミックな空間になる。柱は 42 cm角、そして、高さは 20 mある。梁も 42 cm×21 cmという大きなものを使っている。それが伝統建築を思い起こすような格子状に組み込まれている。木造が正に伝統的なものを引き受けて、未来に受け継いでいく最先端であるということの世界の方々、日本の方々、子どもたちに体感してもらいたい。屋根にも上ることができ、大阪市内、大阪湾、瀬戸内が一望できる。屋根の外側が上がっており、登ると空が丸く切り取られる。見上げる空は一つであるということを感じてもらえると思う。万博は多様な国が集まって、すごく大切なものを共有して繋がり合っているということを実感する場だと思う。空は自然の象徴、地球環境の象徴だと思う。そして、中央に森を配置している。これも会場デザインで重要な場所と考えており、静けさの森という名前を付けている。これからの時代、人工物だけでなく自然のものと共存した会場デザインにしたいなと思い、森をあえて中心に据えている。自然と共に生きてきた日本の文化の根底に根差しているものだと思う。日本の文化を引き受けて、それを未来に、そして世界に発信するデザインにしたい。

◇ 石川 勝氏 会場運営プロデューサー

会場運営プロデューサーとして、ゴミの後始末や警備も重要であるが、様々なソフト事業を所管しており、その一つとして、公式参加国を担当している。そして、目標とする 150 カ国を達成した。各国、計画が具体化してきており、パースを公表している国もある。これからはパビリオンが立ち上がっていく景色も見えていただけだと思うので楽し



みにしていただきたい。機運醸成も担当しているが、様々な場所で機運醸成として盛り上げていただいている。チームエキスポは現在1000のチームが参加しており盛り上がりを見せている。YouTubeでも発信しているのでご覧いただきたい。先日、13番目の企業パビリオンが決まり、全て出そろった。加えて未来社会ショーケース事業として、万博の運営に企業に参加してもらって、万博を盛り上げるという取り組みをしている。バーチャル万博として、万博そっくりなバーチャル空間をサイバー空間に作って、世界中からアバターでアクセスできるという事業を進めている。その他、モビリティとして移動のためのEV、FCVバスや同時翻訳などの準備が進み、整ったところから発表をしている。そして、万博の重要な事業として、テーマウィークに取り組み始めたところである。ドバイ万博では、しっかりしたプログラムを行っていて、例えば、女性館というものがあるが、その中ではアラブの女性の社会参加をどう活性化するかについてトークセッションをやっていた。また、外国のパビリオンでは、そのパビリオンが主催で他の国や企業が参加する独自のフォーラムをやっていた。そのようなことが会場のあちこちで行われていた。例えば、宇宙やヘルスケアといった10個のテーマを設定し、今週はヘルスケアについて徹底して進めようという事業を行っていた。ビジネス交流にも力を入れており、ドバイに対してビジネスで進出していきたい国や企業、誘致したい産業界、経済界、ニーズをマッチングさせるような形でビジネス交流が行われていた。これまで万博ではこのような事業は無く、ドバイが初めて行った。もともと万博というのはデベロッパーであった。会場を作りそこに各国にパビリオンを造ってもらっていた。1970年の大阪万博もそのようなモデルだったが、1994年のBIE総会の決議で万博の目的が大きく変わり、地球的課題の解決のために万博をしようということになった。それ以降の万博では地球的課題解決のために、主催国が世界にメッセージを発信する事業が行われてきた。大阪・関西万博もそれを受け継ぎ、より発展させて、次の万博にバトンを渡すことも重要な役割だと思う。これからテーマを設定して、色々な方にプログラムを作って参加いただく。

#### ◇ 石黒 浩氏      テーマ事業プロデューサー



いのちの未来館として、いのちを拓げるをテーマに進めている。公式のホームページで活動内容を掲載しており、現在、順調に準備を進めている。パビリオン展示は、「いのちと技術の起源にもどる」「共創メンバーと考える50年後の未来のシーン」「技術の進化により人間とロボットと境界がなくなる空間」この3つで構成している。メインは2番目の「共創メンバーと考える50年後の未来のシーン」である。大型の協賛をいただいている7社が色々な業種であるので、学校や病院、高齢者施設などが未来においてどう進化していくのか、おそらく境界が無くなると思う。病院の機能が家庭にも入り、学校も色々な場所で学ぶことができるようになるだろう。いろんな境界が無くなって進化する未来を展示する準備を進めている。これから急ピッチで具体的に展示の詳細を作り込む段階にきている。「いのちの技術と起源にもどる」については、未来において色濃くなるであろう文化を表現したいとずっと申ししてきた。導入の部分で、日本においてどのような文化が醸成されてきたのか、醍醐寺様にも協力していただき、過去の文化を紹介し、そこから発展していく50年後の社会を表現する。人間はテクノロジーと融合して初めて人間だ

と思う。そこが動物と違うところである。太陽の塔に匹敵するものにしたいと思っている。色々なアーティストの力を借りて準備をしているので、楽しみにしていただきたい。万博で展示するものが、新たな日本文化を創るきっかけになれば良いと思う。科学技術というのは手段。どうやって人間としての生きた証を残すのか、人間としてアイデンティティを確立するのか、それは文化だと思う。日本においては日本の文化、未来においては個人個人の文化を醸成していく。そのためには科学技術に支えられて、より豊かな生活を営んでいくということだと思う。そのような未来を来ていただいた人と共に考えていく。50年前の万博との違いは、未来は自分達で決めるものであるということである。昔は未来がどうなるか、地球環境がどうなるか分からなかった。人間をデザインする遺伝子のテクノロジーもあるし、地球環境を守ることも壊すこともできる。我々の未来は我々が考えて創っていかなければいけない。それを考える場所にしたい。私は大阪が地元である。職場としては京都も関係が深い。日本国際芸術祭については、ATRも会場一つにして、テクノロジーと文化を体験できる芸術祭にしてもらいたいと思う。京都とも深くかわりながら準備を進めていく。

#### ◇ 中島 さち子氏      テーマ事業プロデューサー

いのち輝く未来社会のデザインという非常に大きく、面白く、意義のあるテーマが与えられているなどと思う。コロナや世界で色々なことが起こる中、2025年に日本で万博を開催するというはどのようなことなのかと日々考えながら動いている。ドバイ万博から未来共創型になっていると感じる。行って楽しむだけではなく、すでに万博は始まっていて、皆様と一緒に創っていくものである。万博をきっかけに何かが始まり、考えるということなのだろうと思う。過去からみやくみやくと流れている大切なこと、正解



を求めるといふよりはそこに何が流れているのかということ問い直す時間だと考える。大阪も含め、京都の文化やその背後にあるものを子どもたちと一緒に捉えられるといいなどと思う。私のテーマはいのちを高めるである。遊び、学び、技術、スポーツなどを通じて、生きる喜び、楽しさを感じて、共にいのちを高めていく共創の場、コクリエーションの場を作り上げることである。パビリオンの名前は「いのちの遊び場 クラゲ館」である。シグネチャーパビリオンと共にシグネチャーイベントもやっていきたい。必ずしもパビリオンだけじゃなく、夢洲の外側も、そして万博開催前から動いている。パビリオンは上部が開けた公園のようになっている。中心に創造の木があり、下に降りて行くと様々な体験ができる場所になっている。正しい知識を教えてもらうという教育から、知は作り出すところから得られるのである。0歳から120歳の子どもたちと、作りながら学ぶということの取り組みとして、茶室を作りながら、日本文化に出会い直すということをしている。イベントの話もすると、5/3はごみの日として5/3、4、5で世界環境フェスティバルをやりたいと思って動いている。万博の面白いところは、世界中の人が集ってまるで世界旅行をしているように出会えるということである。文化、価値観の違う人と出会うことで色々なことに気づくことができる機会だと思う。事前のイベントでも、他国の人も一緒にやっていきたいと思っている。プレイベントとして、東大阪の花園万博や他の自治体とも万博をきっかけとして一緒に考える機会を開いていきたい。それを通じ、プロジェクトやいのちを考えるということが実現でき、未来社

会のデザインというものができると思う。4/15に大阪のATCでごみ祭りをを行う。楽しくごみに出会って、集めて、アートにして、これはどこに行くのかということを考えるきっかけにしてもらいたい。日本国際芸術祭では、お茶と音楽を通じて、0~120歳の子どもたちと一緒に作り上げられる場をつくりたいと考えている。チームエキスポもだが、万博への道中も含め万博であるので、プロデューサーの皆様とも協力して、一緒にいのち輝く未来社会を作っていきたい。

◇ 落合 陽一氏      テーマ事業プロデューサー



「ぬる」とはコンピューター用語で何もないということの意味する。「ぬる」は仏教用語では空ということですかと聞かれると、その通りですと答えている。デジタルネイチャーとして、新しい自然をどう定義するかを考えている。去年からAIの発展がすごい。イタリアではChatGPTが禁止された。ChatGPTの言語の精度は、英語の次にイタリア語が良い。国の公文書も守秘義務など関係なく書いてしまう。そして、それが学習に回されるのは良くないと思ったのではないかと。我々は何が自然で何がデジタルか

と考えたとき、変化する技術生態系と共に生きていくしかないのは間違いない。GPT4という一番新しいAIに「みやくみやくって知っているか」と聞くと「三藐脈三菩提のみやくのことですか」と答える。「般若心経を知っているからですか」と聞くと、「いいえサンスクリット語が読めますので」と返事が来た。たいていの人類よりAIの方が賢い。「般若心経というのは何について語っているのですか」とAIに聞いたら、「般若波羅密多を中心とした世界の完全性についての議論です」と答えた。プログラム言語ではどうなるかを聞いたら、プログラム言語が出てきた。それを実行すると、たいていのものについては記述できるオブジェクト指向言語が出てきた。しかし、専門家の86%ぐらいである。たいていの人よりは知っているが、専門家ほどは知らないのである。人間をデジタル化して、自分自身とどう対話するのかということデジタルヒューマンのパピリオンでやっていく。人が中に入るとその人のように話す自分と話すというようなことである。鏡は自分の動きの鏡映しでしか動かない。今、作る鏡は、自分の形をしているが、自分と違う動きをし、自分と違う言葉をお話する姿が出てくるのである。パピリオンの中では、人間の外見をどう真似していこうかと考えている。外部は伸びたり縮んだりする新しい建築を造ろうと思う。イメージしにくいですが、全て鏡でできており、一つひとつが伸びたり縮んだり動いたりする。中にロボットアームが沢山入っており、伸縮する膜を動かしている。パースを作成した2021年当時は、伸縮する膜がこの世の中に無かったが、2023年3月になって、無事に伸縮する膜ができやっとな動くようになった。デジタルヒューマンに即座に変換し、自分の言葉で話をさせるといえるものもできるようになりつつある。2025年までには外側が動き、内側に変換された人が出てくるという目標にたどり着けそうなところまで仕上がってきた。何を伝えたいかということ、デジタルというのは人間が作ったテクノロジーに見えるが、生物が固有の形式として生命を保存する中で作ってきた方法である。生命には質量がなく体が失われても生命は続くし、人はもう死なないのである。物理的には死ぬが、死んだ後も話し続け無限に情報を生成できるという入口に立っている。あらゆる森羅万象が繋がっていて、森羅万象がどういう変遷を辿って行くのか、デジタル芸術を通じて伝えていくことが重要だと思ふ。日本でやる意味があると思ふのが、

バーチャルパビリオンである。一度スキャンされると、その時点のデジタル断片ができ、そういったものが無限に話し、あらゆる形に変遷し世界像をひとつ作るということである。ヨーロッパの人には受け入れがたく、西洋哲学の実存上の崩壊が生まれる。しかし、我々日本人は便利なものが好きなので、それで良いと考える。そのような技術がもっと発達していくと、人間はどうやって生きていくのかという本質的にぶち当たる。そこを対話しながら進めていければと思っている。中のコンテンツはPVのように造るしかない気が付いた。世の中の進化が早すぎて、シナリオを作るとシナリオに負ける。般若心経をデジタルヒューマンで作ったらどうなるかということを考えている。抽象化したり言語に直したり、音楽や映像にしてワールドを形成している。内側が仏教で展開されているので、外側に象徴的なものを置きたいと思っている。昨年の11月に仏像を貸してほしいと言ったが、引き続きお願いしたい。

#### ◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー

万博全体でどのような共鳴を起こしていかないといけないのか、ということを中心に話したい。ドバイ万博のテーマウィークのヘルスウィークとまとめの対話のセッションに出た。彼らはサステナビリティを打ち出すことには成功したが、一方で一人ひとりのいのちの輝き、これに関しては全く議論できなかった。それを2025年、日本では検討してもらいたいという言葉をいただいた。一人ひとりがどのように豊かに生きるのか、かつ、それが人だけでなく環境や調和の中でどのような未来に向かっていくのか、



このバランスの中で未来を考えていきたい。ウェルビーイングを分解してビーイング、一人だけでなくコピーイング、共に生きることである。未来を共に考える中で、どう1歩を歩むのか、それがベターという言葉に込められた考え方である。そして、万博で何をしていきたいのか。ドバイではテーマウィークというものが出てきた。今までできなかったことで、今すぐできるようになるのは何なのか。危機感や志の共有ということもあるが、一つの決定要因としては今までにない技術だと思う。まさに農業革命、産業革命、つまり治水技術によって富を蓄積する。これが封建制度の一つであり、人類のコミュニティを強大にし国を作ってきた。この数十年続いてきた情報革命、技術と結びついた中の一つの本質は繋がりである。サステナビリティを可視化したもの、いのちの輝きというもの、共有する中でどのような未来へと歩むのか。それは中島さんが言っていたような、一人ひとりが能動的に世界を創る力になるのではとないかと思う。万博において、個々のパビリオンがそれぞれ別に未来に問うのではなく、その繋がりの中で何かできないかと考えている。世界各国の方々とディスカッションしていく中でイベントをしたいし、藤本さんがおっしゃった静けさの森もある。日本国際芸術祭では醍醐寺様の森の中で何か一緒にできないかと思っている。各プロデューサーとも未来に向けた取り組みを一緒に考えていきたい。データについて、今までは独占型であり、国が全て持つか企業が全て持つかであったが、万博では分散型である。各国が持ち寄り繋げていく。国の戦略であるデータフリーフロー技術、トラストと呼ばれているが、それをアップグレードしていきたい。戦争の反対は対話だと思っている。価値観が相容れ無かったとしても、持続可能な未来を共にできるか、未来のこと考えながら集い、それが何をもたらすかということのを可視化する必要がある。手段としては経済、また、石黒先生の話にはテクノロジーであると話されていた。一人ひと



りのウェルビーイングに繋がるためにはどのようなエコシステムを作るべきなのか、データを共有しながら、各国、企業、地域と連携したいと思っている。Cパビリオンというものがある。いわゆるグローバルサウスの88か国が4カ所の施設に分散して、いろいろな催しをするが、愛・地球博のときやドバイ以前の万博は限られた低予算の中でバザーのようなものを作って下さいというものだった。今回も予算の建付け上非常に厳しいが、世界の経済の視点から見ても、グローバルサウスが鍵である。広い意味での平和や未来社会を考えたとき、彼らをリスペクトしながら歩むのは大事だと思う。藤本さんが限られた予算の中で、美しいデザインを考えて下さった。このデザインの中にどのような企画を一緒にやっていくか、グローバルサウスも含め、その人たちとの出会いや、共創が輝いてこそ次の別の万博に繋がると思う。ぜひ、皆様のご協力をいただきたい。色々な繋がりの中で、皆様と未来を考えていきたいと思う。

### Ⅲ ラウンドテーブル

- |          |           |                       |
|----------|-----------|-----------------------|
| ＜登壇者＞    | ◇ 藤本 壮介氏  | 会場デザインプロデューサー         |
|          | ◇ 石黒 浩氏   | テーマ事業プロデューサー          |
|          | ◇ 中島 さち子氏 | テーマ事業プロデューサー          |
|          | ◇ 落合 陽一氏  | テーマ事業プロデューサー          |
|          | ◇ 宮田 裕章氏  | テーマ事業プロデューサー          |
| ＜モデレーター＞ | ◇ 高橋 朋幸氏  | (株)三菱総合研究所 執行役員 営業本部長 |



**高橋氏：**京都から発信するラウンドテーブルにより、万博の機運醸成に貢献したいと考える。皆様には万博に向けた京都のポテンシャルの活用方法、京都で取り組まれていること、夢洲機構で企画している日本国際芸術祭、海外との共創という観点でご意見をいただきたいと思う。

藤本先生にお聞きしたい。前回のラウンドテーブルでは、木造の循環、伝統の循環というお言葉をいただいた。今回は、木造が遅れている、自然と人工物の共有というキーワードをいただいた。京都のポテンシャルを活用することや、万博に繋げるという観点でアイデアをいた

だきたい。

**藤本氏：**木造が遅れているという言葉を使ってしまったが、遅れているのではなく、最も最先端だった伝統の蓄積があるからこそ、火災のことなど厳格なルールが作られてきた。ヨーロッパはそれを飛ばしてどんどん先に進めている。今までの 1000 年以上の伝統の蓄積をベースにしてこそ、未来へと投げかけられると思う。あえて、伝統建築に根差した造り方で考えている。効率の良い新しい技術もあるが、そうではなく、金属の部品をなるべく減らすことで、解体の手間を少なくすることができる。昔の日本の建築は、簡単に解体して移築するというをやっていた。万



博も半年間であり、その後は解体してどこかで再利用する方針であるので、楔で止めるというのは非常に効率が良い。幅が 30mあり非常にダイナミックな建築物となる。それと同時に、伝統木造の根源は京都を含め関西エリアに沢山あるということをシンプルにアピールできると思う。その両方を見てもらうことによって、これまでの蓄積があつてこそその未来であると感じてもらいたい。京都には日本の庭がある。これはまさに自然と人間の活動の共存の最先端であるともいえる。人工物と自然の物が融合することで生活環境が成り立っていることを考えると、ものすごく普通のことであるが、忘れられてきた 100 年 200 年だったと感じる。最新の建築だけで勝負するのではなく、伝統建築の根源がここにあり、その最先端が万博会場にあるという、その両方を見ていただくことができるのは非常にメッセージ性がある。伝統建築の根源があるというのは、簡単に作ろうと思ってもできないことである。それを持っているという強みを最大限発揮するべきだし、できる環境にある。それは相当なポテンシャルだと思う。

**高橋氏：**続いて石川先生にお聞きしたい。前回のラウンドテーブルでは、人のレガシーを創ることや、寺社仏閣にはイノベーター的な役割があったというお話があった。今日はテーマウィークについての話が中心であった。京都らしさを表現する機会として、取り組める余地や可能性、アイデアなどをお聞かせいただきたい。



**石川氏：**京都といえば幕末の中心地になった場所であり、すごい数の対話がなされていた。世の中の価値観が大きく変わるときは対話が膨大に生まれ、その中から大きな社会の意思というものが生まれ、それが結果として力強い行動を促していくものである。京都に新幹線で来ると、京都駅にはすごい数の外国人がいた。コロナの中でジャパンロスになり、日本に来るのを楽しみにしていた方が多かったのだと感じ、インバウンドの回復に期待がもてる印象を持った。2005 年の愛知万博のときはプロデューサーチームに入っていたが、あのとときの風景と今の大

阪・関西万博の風景はかなり違うと感じる。そのひとつが対話である。愛知万博のときも色々な議論をしたが、どちらかという自分たちのビジネスにどう役立つのか、お客様に来てもらうための方法などの議論が中心だった。世の中の在り方を変えるという観点で万博を役立てることについての議論は圧倒的に今の方が多い。当時は無かった SNS という一人ひとりが繋がるプラットフォームができ、一人ひとりが意見を言い、そこで大きなムーブメントを起こすということに、世の中の人々が慣れてきた。大阪・関西万博は対話が重要なキーワードになっている。普段、日本人の感性で対話をすることが多いが、世界中の人々が半年間に渡り同じ場所にいる。驚くような視点の意見に接する機会が沢山ある。そのような機会を多く作り、輪を広げていくことで、多角的な価値観や視点を持ったムーブメントが起こるようにしたい。その中から、前回お話したような、人にレガシーが残るような取り組みを増やしたいと思っている。

**高橋氏：**続いて石黒先生にお聞きしたい。前回のラウンドテーブルではアバター体験という話をされた。今回は過去の文化と新たな文化とテクノロジーという話をいただいた。これから万博前に取り組んでいくことをお聞かせいただきたい。



**石黒氏：**まず、夢洲機構が中心に準備している日本国際芸術祭を成功させたい。この醍醐寺様も舞台なるし、精華町の ATR も舞台になる。テクノロジーの展示をするには ATR が適しているし、色々な企業の研究所もある。科学技術そのものが文化ではないが、それを使った展示物というものは準備できると思う。ぜひ、万博を盛り上げるきっかけの一つなればと思う。藤本先生の話聞いて、大きな木造の回廊で包まれた空間の中に、色々な日本の文化が花開く万博になればいいと思う。それに向け、一気に気分を盛り上げ、未来に向けて自分たちで文化を創っていくというような万博になればと思う。

**高橋氏：**日本国際芸術祭はぜひ万博と連動して、万博の後も開催していきたいと考えている。続いて中島先生にお聞きしたい。前回のラウンドテーブルでは日本文化の面白さや思想変革というお話をいただいた。今日は作るを通して学ぶということをおっしゃっていた。万博前から色々考えられていることをお聞かせいただきたい。

**中島氏：**少し抽象的な話をするが、創造性の民主化という言葉を使っていて、皆が本来持っている創造性が十分に開けていないだけで、技術のおかげで、今それを開いていけるような社会や文化の起点にあると思っている。万博を通じて、そのようなことができれば良いなと考えている。未来の地球学校として、色々な点と点を繋いで、例えば特別支援の子どもがこんなことしているとか、ご高齢の方がこんなものを作り出しているということなど、創造性を見せ



ていく活動を少しずつ始めている。それを京都の皆様、0~120歳の子どもたちに関与してもらいたい。万博は強いもの、大きいものというイメージが付きやすいが、弱くて、小さくて、少ないもの価値、それが正にいのち輝く未来社会のデザインだと思っており、インクルーシブとか、世界とか、対話という言葉を使っているが、言葉だけじゃなく、音楽的だったり、身体的だったり、五感を使うようなもの、それは、お茶や音楽、祭りかもしれない。そのようなものを通じて、感じ取るということが大切だと思っている。そして、過去から未来を繋ぐということを模索したい。具体的にはお茶の世界を通じて、日本文化や背後にある思想など、私たちが何を感じるかということをつえられたら良いと思う。ごみ祭りや花園万博など、皆で体験しながら作っていく活動を仕掛けていきたい。今は一方的に話しているが、この出会いから、メンバーが増えていけば良いなと思っている。プロデューサーの皆様も含め、どんな共創ができるかなと楽しみにしている。

**高橋氏：**続いて落合先生にお聞きしたい。前は仁王像の話があり、機運醸成も今年からという話があった。先ほどの話では未知の風景、未知の体験という話があった。こういったことで京都のポテンシャルが使えると思うが、アイデアをお聞かせいただきたい。



**落合氏：**京都に来ると、テクスチャーが豊かだと感じる。屏風が綺麗であるとか、仏像が素晴らしいとか、空海の手紙をリアルに見ることができるなどである。我々の中で持ち上がっている問題はシンプルで、LEDのスクリーンの良いものを建てようと考えたとき、中国の映像博物館で使われるLEDは末端価格で400億ぐらいする。原価で120億ぐらいだと思うが、テーマ事業全体の予算の半分ぐらいになる。中国に行けば万博より良いものがあるということになるのである。テックで良いものは規模としては勝てないが、小さなものを綺麗に見せるということはできる。テクノロジーが良いというものは見せられるが、それはサイエンティフィックなミュージアムなら良いが、万博ではもっと違うものを見せたいと思う。私はドバイのキラキラしたところはあまり好きではない。シャルジャなどの石造りの街並みや、お酒を飲んではいけなところを歩いたりする方が好きである。そのような見に行く価値があるものというものが京都には沢山ある。万博でもそのテクスチャー感を上手く伝えていきたいと思っている。

**高橋氏：**続いて宮田先生にお聞きしたい。京都の普遍的な文化をパビリオンの中に作っていききたいという話があった、また、後でパビリオンの話をするかもしれないとおっしゃっていた。そのあたりをお聞かせいただきたい。

**宮田氏：**知事、市長から文化というキーワードが大事であるという話をいただき、石黒さんも文化というキーワードをおっしゃった。今のSDGsには文化がない。ドバイのテーマウィークにも文化がない。日本でのテーマウィークには文化というテーマウィークがあっても良いと思う。例えば、平和というテーマウィークであれば、広島や長崎が連動できるし、文化というテーマウィークであれば京都を軸に展開



できたら良いと思う。万博とは何だろうと考えたときに、文化と文明の言葉の定義はあるが、文明を意識的に考える場なのかもしれない。文化という言葉で考えると、守るということや過去を振り返るという話になりがちである。万博とは、異なる文化が出会いながら文明を意識的に創る場ではないかと思う。日本で最も豊かで深い文化のある、京都が持つ縦軸の歴史の中で紡いできたものを考え、文化の先にどんな未来を見ていくのかということが大事だと考える。中島さん話に茶の湯という言葉があったが、

茶の湯が始まったのは戦国時代である。殺し合いをしている大名がその価値観を越えて、一人の人間として対話するというものが、茶の湯の一つの考え方なのかも知れない。まさに世界で起こっている戦争。そのようなことを乗り越えるのは簡単ではないが、対話を続けること、向き合うことは大切である。京都という地と共鳴するような形で何か新しい試みができればと思う。我々のパビリオンは水と光がキーワードとなっている。木漏れ日によって受けた光が柔らかく散らされた中で、人が介在する行動を通じて感じる体験。正に真言宗や仏の光に通じる、祈りのようなものである。それをアートや文化と共鳴する形で日本国際芸術祭の中で考えていきたい。それはパビリオン体験に繋がるものであるが、万博という場所と世界の今を繋げられると良いなと思っている。

#### IV 閉会の挨拶

##### ◇ 壁瀬 有雅大僧正 世界文化遺産 京都 醍醐寺執行長

本日は醍醐寺にお越しいただき、また第2回のラウンドテーブルを醍醐寺で開催していただき感謝申し上げます。密教において、仏様はバーチャルであり、私たちが説いていることは、先ほども話に出てきた「空」、シュニャータということである。これを説明するために曼荼羅がある。それをAIが理解したということは、我々の仕事なくなるのではないかと心配になった。いずれにしても、文化と宗教というもの、これはどこかで相反するところあるだろうと思う。宗教というものは絶対的なものであるのに対し、芸術は主観的なものであらねばならない。そこにどこかで一致点があるのだろう。また、崇高な芸術は宗教に通じるだろうと思う。今日の素晴らしい話を多くの方に知っていただきたい。この春、醍醐寺にも沢山の観光客に来ていただいた。文化的なこと宗教的なことを感じにいらっしやっただのと思う。大阪・関西万博が大成功することを心より念じている。



##### ◇ 井垣 貴子 (一社) 夢洲新産業・都市創造機構 代表理事

夢洲新産業・都市創造機構は、文化庁が移転し、文化芸術首都とも言える京都から、大阪・関西万博に向けて、SDGsのみならずその先のBeyond SDGsの根幹となる文化芸術を日本から世界に発信するために、ご登壇者様からもお話しがあった「日本国際芸術祭」を毎年開催し、万博後も、日本が世界に対して「文

化＝平和」を発信していく。そして、万博の公式参加国が150カ国を越え、共創が始まる今、3月に第1回公式参加国共創フォーラムを開催した。第2回の開催も決まっており、今後も万博まで継続開催する。京都で開催した本企画が、関西のみならず世界に対して、平和というものが危機的状況の中、一人ひとり全員が幸せに生きられる世界に向けて多様な共創を導き、大阪・関西万博成功に向けた機運醸成に貢献出来れば幸いである。ご臨席いただいた皆様とのご縁に深く感謝し、閉会のご挨拶とさせていただきます。先生方と皆様と世界に向けて日本の心温まる平和の文化を伝えていきたい。

以上